
与えるということ。

あぼかりぷす？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

与えるということ。

【Nコード】

N7663X

【作者名】

あばかりぷす？

【あらすじ】

普通な生活をしていた少年が幻想入り。幻想入りしたときの最初の場所は森だった。普通の少年がいきなり妖怪や妖精が徘徊するよくな場所に投げ出され、いきなりハード設定で始まる。そんな話し。

一話（前書き）

以前 東方雷震紀 という名前で最初を少しだけ投稿。

いろいろと改良したい点があったので一度引き上げて再投稿します。

処女作なので、生暖かい目で見られるようがんばりたいと思います。

一話

1話

ジューーーーー……

その音は灼熱の炎によって奏でられている。

ああ……いい匂いだ。

今すぐにでも食べてしまいたいくらいに……。

焼いていると涎が止まらなくなりそうだ。

慎重に、焦がし過ぎないようにその光景を眺める。

焦げそうになったら それ を動かし焦がさないようにする。

ふふ……まともなのを食べるのも久しぶりだな。

そう思いながらニヤニヤしながら調理する。

まだかまだか、と絶妙なタイミングを計る。

そろそろ大丈夫だろう・・・最後の仕上げに入るとしよう

そう

俺は今・・・

焼きそばを作っているのだ。フライパンで。

いやー、久しぶりだなあ。

先月は本当に死ぬかと思った。まさかバイトの給料をもらってルン気分で家に帰ったら玄関に怪しいオッサンがいていきなり壺を押し付けてくるんだもんなあ。

最初は　はあ？　って思ってたあたり前のように断ったが、なぜか俺の名前を知ってるし。しかも書類を押し付けられて読んでみたらこれまたなぜか俺名義で壺を買うことになってるし。

何がどうなってるんだ・・・？俺こんな壺買った記憶ないんだが・・・。

そう思いながら首を傾げるとオッサンが手紙を渡しながら

「これを読んでください」

という。これに壺購入の謎が書いてるのかと手紙を読む。
とても短い文だった。

ごめん、壺を買わされちゃった（笑）

俺、金ないからそっちに送っとくわ。

まあこれも経験と思って甘んじて払っておいてくれ

父

頬を引きつつっているとオッサンは何かを察したらしく、突然俺のポケットに手を突っ込まれた。

ハッとなったってその手を取ろうとするが時すでに遅し。

ポケットに突っ込まれた手はすでにオッサンの胸にあり、そしてその手には給料の入った封筒が握られていた。

俺が固まっているのをいいことに、封筒から金を出し、金を数えていく。

数え終わると1000円札だけ封筒に戻し、固まっている俺のポケットに封筒がねじり込まれる。

「たしかにお金は頂戴しました。では、これで」

去っていくオッサン。

それを眺め続ける俺。

ポケットの中には1000円札がこんなにちは。

近くには地面の上に置かれた壺が入ってるだろう木箱がこんばんは。

とりあえず………この壺を売ること考えよう。

「うん、何処にも名前らしい物が記入されてないし、作りも荒い。これじゃあ買い取ることはできないねえ」

「えっ」

「………」

「えっ」

「そんなことよりもお兄さん、いい体してるねえ」

「失礼しました。」

売れなかった。

家にも飾るかな。素人目にはわからないし。

両手で壺を持って家に帰宅する。

が、

予想できない事態が起こってしまった。

靴を無理やり脱ごうとして足を滑らした。そしてそのまま玄関前で
トラアアアアイ!!!

粉砕される壺。飛び散る破片。顔面ダイブして顔を思いっきり打つ
俺。

悶絶しながら顔を上げ粉碎された壺に目を向けると、なにやらちよつとした白い煙がでていた。

でもすぐ消えたことで気のせいだと思い、飛び散った破片などを片付けるのだった。

それから次の給料日まではひたすら

モヤシ！モヤシ！！モヤシ！！！！

正直ヤバかった。栄養失調で倒れるかと思った。

なんでこんな生活をしなければいけないのか・・・

とりあえず親父が帰ってきたら顔が変形するまで殴ろう。それを胸に秘めてがんばってきた。

そしてとうとうモヤシ生活ともオサラバ！

モヤシ以外の野菜たっぷり！ソースの焼ける匂い！ソースが絡み合ってる麺！そして何より肉！最高すぎる！

自分の限界まで食おうと5人前も用意した。

さあ食おう！今すぐ食おう！

皿？そんなもんはいらない！フライパンを皿に直接箸で食ってやる！
台所を出てリビングへ続く扉を開く。

そこは………森だった。

.....
は
?

一話（後書き）

東・・・方・・・？

一話

2話

森だ、森がある。

え、どゆこと？

後ろを振り返ってみるが、さっき開けたはずの扉がない。

いやちょっとまで、さすがにおかしいだろ。

少し思い返してみよう、何かヒントがあるはずだ！

やきそば作る リビングに行く 森にいた \ (^o^) /

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

『リビングの扉を開いたらなぜか森にいた』

な…何を言ってるのか わからねーと思うが
俺も何をされたのかわからなかった……

実は リビング 森 だとか
そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

と、とりあえずどうするべきか考えよう。何か役に立つ物はもって
ないか・・

服はいつもどおり部屋着用のジャージ

ポケットには何もなし

そして手にはヤキソバが5人前が乗ったフライパン

電波(そんな装備で大丈夫か?)

「大丈夫じゃない、問題だ」

いや、落ち着け

そっだ、こっとうときは素数を数えるんだ

1 2 3 4 5 . . . ってこれはただの自然数だ！

2 4 6 8 10 . . . これは偶数！

1 3 5 7 . . . もっいいよ！これ奇数だよコノヤロウ！

0 1 10 11 100 101 . . . 2進数 . . . だど？な
んで知ってんだ？俺

素数は . . . 素数ってなんだ . . . ？

こんなところで頭が悪いとダメなのか！チクショウ！

他だ、他に何か落ち着けることを考えるんだ。

よし、こっとう考えるんだ。

何も持たずに全裸で森に突撃するよりはマシだと。

ちよつと落ち着いてきた。

他人が自分よりも慌てているのを見ると安心して自分が落ち着くという話は本当かも知れないな。これは妄想だけだ。

とりあえず歩こう。ここに止まり続けても仕方ない。幸いまだ朝だ。

ヤキソバは非常食として慎重に食べていこう。

なあに5人前もあるんだ。ヤキソバが尽きる前に人を見つければいい。

……でも歩く前に少し食べよう。もうすでに腹が空いて仕方がないんだ。

少年移動中・・・

2時間は歩いただろうか

歩けど歩けど木、木、木

実はここは数十キロも森が続いていて、そして自分はその中でバカみたいにグルグルと歩き回っているだけじゃないか？

ってダメだ、何をネガティブになってるんだ。プラス思考で行こう
プラス思考で。

何か楽しいことでも考えながら進めばいいかもしれない。

さて何を考えようかな・・・楽しいこと楽しいこと・・・

そつだ、俺が小学校のころ家で親父とやった自分の誕生日のことを
思い出そう。

ああ、あの頃は楽しかったなあ

〈回想〉

「陽介え！お前今日誕生日だろ！仕事帰りケーキ買ってきてやる！」

「まじでか父ちゃん！俺、ちゃんといい子にして待ってるよー！」

「おう、待ってるよー！それじゃあ仕事行ってくる！」

「いってらっしやい！」

父帰宅

「今帰ったぞ〜」

「おかえりー！父ちゃん、ケーキ、ケーキは！？」

「おう！そんな物は買ってない……！」

「……………え？」

「あれは嘘だ！だって今日は エイプリルフル だからな！ワッ
ハッハッハッハ！」

ワッハッハッハッハ

ワッハッハッハッハ・・・

〜回想終了〜

「何だろう、楽しいこと考えようとしたはずなのにすごいイライラ
してきた・・・俺なんで誕生日のことなんて思い出したんだろうか・
・何で俺の誕生日は4月1日なんだよバカやるおおおおおおおお
おおおおお！！！！！」

なんか無駄に叫んでしまった。疲れるだけなのに、何をやってるん
だ俺は・・・

わはー

ん？今声が聞こえた気がする。

人か！もしかして人がいるのか！

周りを見渡すと右の方に黒くて丸い何かが浮いている。

そしてその黒いのがどんどん近づいてきてる・・・？

人・・・じゃないよな・・・？

そう思いながら黒いのが来るのを待つ。

そして1mほど離れた所で急停止。大きさはたぶん130cm前後・

・・・？

よ、よし、話しかけて見よう。何か反応あるかもしれないし。

「あの、すみ「あなたは食べてもいい人類？」せん・・・」

どうしてこうなった？

三話（前書き）

東方ほとんど絡んでないのにお気に入りが2件。
驚きつつも嬉しい限りです。

ありがとうございます〜

三話

3話

食べられる人類って何？

ここで 俺は食べられる人類だ！ って叫んだらどうなるんだろう。

食べられるのか、この黒いのに。

もしかすると食べるとは性的な意味で……？ いやいやいや、
それはない、というか嫌すぎる。

『俺の初めては黒い物体なんです ミ』

なんて過去作りたくない。どんなジャンルだ。そして誰得だ。

黒いのが喋って言葉に詰まっているとだんだんと黒い靄が薄くなっ
ていく。

中から出てきたのは女の子だった。金髪の髪に赤いリボンをちょこ
んと付けた少女

なんで女の子が出てくるんだ？ しかも………浮いてる？

「ねえ、食べてもいい？」

再度食べる食べないの質問をされる。

目が合った。

ゾクッ

なんだ・・・これ？すごい寒気がした。

この子なんかヤバイ、とにかくヤバイ！

頭の中で逃げる逃げると警告がなる。と、とにかく適当に誤魔化して逃げよう。そうしよう。

「お、俺は食べられない人類だぞ〜?」

「そーなのかー?」

「ああ、俺は食べられないんだ、残念だったな」

「そーなのかー、じゃあこんな所で何をしてるの?」

「ちょっと道に迷っちゃってな、ここどこかわかる?」

「ここ?幻想卿の森なのだー」

「幻想卿・・・?」

「お兄さんは幻想卿知らないのかー?」

「ああ、知らないな・・・幻想卿って何?」

そーなのかー そう返す女の子

すると女の子はふわふわと俺に近づき、口を大きく開けて顔に噛み付いてきた。

「あぶなっ!」

とっさの出来事だったがなんとか横にステップし回避する。

「なんで逃げるのかー？」

「俺は食えないって言っただろ！」

不思議そうに首をかしげる女の子

「でもお兄さんって外来人じゃないのかー？」

「何だよ外来人って・・・！」

「ほらー外来人だ。人里の人は食べちゃダメって言われてるけど外来人なら食べてもいいって言われてるのかー」

だから

いただきます」

ヤバイヤバイヤバイ！

幻想卿って何だ！外来人って何なんだよ！意味わかんねえよ！

考えろ、食われないために何か考える俺！

ってそうだよ、簡単じゃないか！俺にはヤキソバがあるじゃないか！
ありがとう！モヤシの神様・・・じゃなくてヤキソバの神様ありがとう！

「ちよつとまつたー！！！！！」

動きがピタリと止まる女の子。

「んー？どうかしたのかー？」

「俺は食わせられないけど、代わりにこれをやるっ。」

「俺を食うよりも絶対にうまいはず！」

女の子にヤキソバ（4人前）が乗ってるフライパンを女の子に渡す。

まじまじとフライパンを眺める。

「んー？これはおいしいのかー？」

「ああ、うまいって！嘘だと思っなら食べてみてくれ！」

うーん と悩みながらもヤキソバを食べる女の子。

「おー、うまうまー」

女の子はニコニコと笑いながらヤキソバを口に掻きこむ。

その後景を俺は少しビクビクしながら眺めた。

「ごちそーさまー」

満足そうにニコニコしている。

ああ……俺のヤキソバが……。

空になったフライパンを手に持つ

食われなくてよかったが、食料が全部なくなってしまった。

これからどうしよう……。

悩んでいると前の方から あーーん という声が聞こえてきた。

前を見ると今にも俺に食らいつきそうになっている女の子が。

「うおおおおお……！」

びっくりして倒れこむ。

そのおかげでなんとか回避できた。

かなりビビリながら なにすんだ！ と叫ぶが

「あれだけじゃ全然足りないよ」

そんなことを言いながらもこっぴくに口を近づいてくる。

ヤバイ……

効くかどうか知らないけど、こっぴくなったら……!!

右手に持つフライパンを握り絞める。

これでも食らいやがれええええええええええ!!!!

体勢が悪いが今の体勢でできる精一杯の力を込めてフライパンの裏で女の子の横顔に衝撃を与える。

すると……自分の力ではないみたいにな女の子が吹き飛び、木に叩きつけられる。

あれ・・・？どうなってんだ？俺ってこんなに力あったっけ？そう思いながら片手をグーパーグーパーと握る。

「ううう・・・いったーい！！！」

声の方向を見るとプリプリと怒った様子の女の子がいた。

あれでダメージ無しなのか・・・。どんな体してるんだよいったい。怒ってるんだろうけど、普通に可愛い。ただ、殺気なのだろうか。怖い何かヒシヒシと体に伝わるけど。ものすごい逃げたいです。

「もー！何で攻撃するのー？」

「阿呆か！攻撃しなきゃ食われてたじゃねーか！」

「人類なんだから食べられるくらい別にいいじゃない、大人しくしててよ！」

「大人しくできるかあああああああ！！！」

理不尽な物言いに思わず言い返してしまう。だって仕方ないだろう。死活問題なんだから。

その返答に女の子はぷくーっと頬っぺたを膨らませる。

「いいもん、殺しちゃえば逃げないだろうし、踊り食いできないのはちょっと悲しいけど……」

とても物騒なことを言いながら両手を横に広げる。

月符「ムーンライトレイ」

声と共に自分の居る方向に閃光が走る。

しかし命中精度は悪いのか頭ひとつ分右に光線が流れた。

思わず……は？となるが驚く暇もなく立て続けにいくつも光線が放たれる。

「アハハハハハハ、死んじゃえ死んじゃえー！」

笑いながら放たれる光線。助かることに光線といっても光の速度ではない。それでも十分速いのだが。

がむしゃらに回避する。かろうじて当たってはいないものの何箇所もかすってしまい痛みで序所に動きが遅くなる。

それでも止まるわけにはいかない。命中は悪いのだろうがその分数がある。

数分なのか数十秒なのか・・・、一発当たればゲームオーバーな状態。精神的にも体力的にも厳しくなっていた。

集中力が少しづつ途切れていき、光線の当たった地面にできた20cmくらいの窪みに足を取られてしまう。

しまった。そう思いながら前方を見れば幾つ物光線が目の前にまで迫っている。

グツと目を瞑る・・・・・・が、何の衝撃も痛みも来ない。

んん？と目を開けて視界に映るのはさっきまで少女が立っていた場所に口のようにグアッと広げられた人一人は入れるだろう空間、口の端には可愛らしいリボンが付いているが中が怖い。いくつもの目がギョロギョロと映し出されている。あ、今一個目が合った。怖！

そして序所に空間が狭くなっていき、最後に二つのリボンがくっ付いた所で跡形もなく消え去った。

いったい何があったのか・・・。あの女の子は何処に行ったのか。

分げがわからないがとりあえず危機はさつたんだろう。

「何なんだよいったい・・・」

立ち上がるうとするが。

立てない。

こゝ、腰抜けた……。

四話（前書き）

感想ありがとうございます！

まさかまだ3話しか投稿してないのに感想を貰うとは思いませんでした。。。

四話

4話

はあ、はあ、はあ・・・。

つかれた・・・

あんな衝撃的なことがあってもなくても、森で迷ったままなのは変わりなく。

どこか休める所は・・・と。

周りを見渡すが相変わらずの森だった。

しかし目を細めて前方を見ると自分の周りよりも明るくなっている場所が見える。

歩いてその場所にたどり着くとそこは木が生えていない小さな広場みたいになっていた。

目測で幅25メートルくらいだろうか。森は木の草が日の光を邪魔をして少し暗くなっていたが、この広場は木がないから明るくなっている。

陽介は広場の中心に行き大の字になる。

ここなら周り全体が見えるし、ちょうどいいか。

目を閉じると日の光と風が心地良い。

想像以上に疲れていたのだろうか。

少し休むだけのつもりが、小さな寝息を立てて意識が落ちた。

s a i d 三月精

森歩く3人の少女達がいた。

しかし彼女等は人間ではない、妖精・・・大自然の具現と呼ばれる存在だ。

雨が降ったり、風が吹いたり、草が生え、花が咲く。

そんな一つ一つの現象に妖精が宿ると言われている。

姿形は様々であり、人とは変わらない者が多い。

決定的な違いとして背中に透明な蝶やトンボのような虫の様な羽が生えている。

「サニー、本当にこの辺りに甘い果物の木なんて生えてるの？」

つかれた顔をした白い帽子をかぶった妖精、ルナチャイルドがオレンジ髪の子のりボンでツインテールにした妖精、サニーミルクに疑いの目をかける。

「ちゃんとあるわよ！だって拾った新聞に書いてあったんだもん！」

その言葉を聴いて固まる。

「えっと……その新聞の名前って何？」

「たしかー、えっとー、文々。新聞って書いてたかな？」

その言葉を聞いた二人は はぁ・・・ とため息を吐く。

「どっしたの？」

言葉を返すのが面倒なのか、それとも落ち込んでいるのかわからないが言葉を返さない妖精の変わりに黒髪の妖精、スターサファイアが変わりに答える。

「その新聞って嘘ばかり書くので有名な新聞なんだよ？それに新聞に載ってたらみんな取りに行つて果物なんてなくなつてるよきつと」

その言葉にサニーは驚き そんなー と、言葉と共に落ち込んだ。

「はぁ・・・なんでこんな所にまで来たんだか。探すのに疲れたし少し休憩しましょ？」

その言葉に頷く二人。

3人は10メートルほど空に浮かび上がり休めそうな所を探す。

サニーは少し行ったところにポカンと木が生えていない広場を見つ

け出して指をさす。

「あそこがいいんじゃない？暖かくて気持ち良さそう」

3人はそこに向けて飛び、着地する。

そこで3人が目にしたのは広場の中央に大の字になって眠る青年の姿だった。

s a i d o u t

暖かい日の光に当てられ、ほどよい風が吹き、気持ちよく寝ていた中声がして少しずつ意識が戻っていく。

「なん・・・所に人・・・のよ！」

「わた・・・知って・・・ないでしょ！」

「どろし……逃げ……かな？」

声がつるさくて意識がハッキリとした。

俺……寝てたんだっけ？何で寝てたんだ……？

たしか、いきなり知らない森にやってきて、散々歩き回ったんだっけ……？

そのあとなんか食われかけて。なんとか生き延びて……そのあとは休憩できる場所を見つけて横になったんだっけか？

……しかしうるさいな。これじゃ寝れないじゃないか。

ん？うるさい？

声？

人！！人がいるのか！！寝てる場合じゃないじゃねえか！

勢いよく上半身だけ起こして、言い争いをしている二人を止めようとしていた黒髪の女の子と目が合った。

「わ！！！！！！」

「うひゃあ！！！！！！」

「ちよつとスター、いきなり驚かさないでよ！」

「いや・・・人間が起きたからびっくりして・・・」

「え？」「」

二人は恐る恐るこつちを見て、三人は顔が青くなっていく。

「ルナあゝ・・・？音を消してたんじゃないの・・・？」

オレンジ髪の少女がルナと呼ばれる少女に少し泣きそうな声で尋ねた。

「そんなことしてないわよ・・・そ、それにサニーだって私たちの姿を隠してないじゃない」

言い返されて うう・・・と怯む。

そして三人は一度顔を見合わせた。

「に、にげろおお！！」

帽子をかぶった子の合図で全員が逃げ出した。陽介は ちょ、ちょっと待ってくれ！！頼むから！ と立ち上がり叫ぶのだが、言葉はむなしく無視され3人は草むらの中に突っ込んで行く。

「あゝ・・・せつかく人(?)がいたのいい・・・」

膝と手を地面に付きたため息を吐き落ち込む。

また森の散策か・・・しかも食料もないしどうしたもんか。

さっきの三人はいつたい何者だったんだろう？

いまさらだけど、まさかあいつらも俺を食いに来たとか・・・？逃げただけ。

自分を食べようとした存在に比べたら怖いとは思わなかった。むしろ怖がらしてしまった方だし。

それに背中の中の羽・・・人ではないってことなのかな？

気になることも言ってたし。

音を消す に 姿を隠す か。

そついう超能力みたいな能力が存在する所なのかな、ここは。

そついえば俺からヤキノバを奪ったアイツもなんか黒い霧やら光線を出してたし。

それに出会った全員が空を飛べるみたいだ。

いまさらながら、とんでもない所に来ちゃったなあ。

五話

5話

陽介は去って行った妖精達のいた場所を少し悩みながら見ていた。

2分ほどボーっとしていたが頭を振り、足元に落ちていたフライパンを拾い上げる。

そして自分が広場にきた方向を確認し、逆の方向に足を運び歩き出した。

「とりあえず歩こう。食料も何もないし、夜の森とか怖いし……」

そんなことを呟きながら歩く。

この森にやってきた時刻はたしか8時頃。

生い茂る木の葉の間から少し空が見える。まだ明るいが確実に昼は

過ぎているはずだ。

日没までに時間がない。

そう考えると自然と早歩きになっていた。

ジャージ姿で片手にフライパンを持ち森を歩き回る少年。

傍から見たらとてもおかしな目で見られるだろう。

それに今は素足である。

家の中からいきなり森だったから靴を履いている暇などあるが
ない。

今現在もかなり痛みがある。当然だ、何時間も素足で森を歩き
続けているのだ。

痛まないほうがどうかしてる。

もうどれほど歩いただろうか。方向感覚が掴めない、自分が真
直ぐ歩いているのか、それともひたすらグルグルと同じ場所を回
っているのか。

空が暗くなってきた。

木が生い茂る森では日が遮られているためさらに暗い。

まだ大人にもなっていない少年が一人で森を歩く。

知っている森を歩くならまだいい。しかしここは知らない森だ。

そして食料もなく、いつ自分を食らいに来る存在が来るかもわから

ない。体力には自信があるがさすがに疲れる。それに体力よりも足の痛みと精神的苦痛が辛い。

もうこの森で自分は朽ち果てるのだろうか。とも考えるがなんとか耐える。

まだやり残したことが多い。それに、まだ親父を殴っていない。

やり残したことを考えつつも歩く。

まだあのゲームを買っていない。結構楽しみにしていたんだ。

まだ食べたいものだったたくさんある。どうせなら一度は食べてから死にたい。

それに、また友達と遊びたい……。

•
•
•
•

そんなことを考えていると後ろの方から悲鳴が聞こえた。

「ねえ、どこまであの人間について行く気？」

「いいじゃない、どうせ暇なんだし。それにちょっと気になるのよ。」

「気になるって？」

「たぶんだけど、あの人間は人里の人間じゃないわ。だってこんなところで一人で歩き回るなんてどうかしてる。力の強い人間ならわかるけど空は飛べないみたいだし。」

「人里の人間じゃないって・・・もしかして外来人？」

「おそろく・・・ね」

実はこの三人の妖精、草むらに逃げたのではなく逃げたように見せかけたただだったのだ。

妖精は騒がしい所を好む。妖怪や人間が集まっている所によく顔を出し、反対に陰気な場所には近づかない。

妖精は小さな子供と同じような知能が多いため、興味を示す物が多く、今回は外来人を追いかけてみることになった。

一度陽介から見えない距離まで移動するとサニーミルクの 光の屈折を操る程度の能力 で自分たちの姿を消し、ルナチャイルドの周りの音を消す程度の能力 で自分たちの周りの音を消して陽介の後を追いかけたのである。

しかし、数時間ストーカー行為と続けていたがさすがに何の展開もないので三人は少し飽きてきていた。元々陽介を助けるために追いかけたのではない。何か面白いことが起きるのではないか? と思いついて追いかけたのである。

幻想郷は弱肉強食の世界だ。人里の人間に妖怪は手を出してはいけ

ない。というルールはあるものの、知能の低い妖怪には当てはまらない。なぜなら本能のままに生きているからルールすら覚えられないのだ。

「ねえ、もう帰らない？きつとこのまま追いかけても何も無いんじゃない？」

サニーミルクがしびれを切らして帰ろうと言い出した。

「そうね……。もう帰りましょうか。どうせいつもみたいに外来人は妖怪に食われてお終いでしょ、きつと」

ルナチャイルドは同意し、他の二人も頷いた。

そう、実はここ幻想郷に来る外来人はそう多くはないが希少という

わけでもないのだ。

どこに来る。というのは決まっではない。

陽介のように森の奥の場合もあるし、最悪の場合は冥界や地獄に飛ばされることだってあるのだ。運がよければ人里付近や、博麗神社に直接飛ばされる。この場合はほぼ確実に元の世界に帰れるだろう。

元の世界に返れる方法は二つ。

博麗神社の巫女 博麗 霊夢 に頼み元の世界に返してもらおう。

普通はこの方法で帰ることができる。

もう一つの方法は

妖怪の賢者とも言われる妖怪 八雲 紫

この妖怪の能力 境界を操る程度の能力 を使えば帰ることができる。

しかし八雲 紫という妖怪は神出鬼没で有名だ。境界を操ることで

何処にでも移動することができるのである。どこかに屋敷があるそうなのだが、場所を知っているのは自分と式神である八雲 藍くらいだろうか。

この方法で外来人が帰れたことがあるかは不明。

幻想卿で妖怪が人里の人間を食べないように定期的に外来人を幻想卿に送り込んでいるという話もある。

二つ名に 神隠しの主犯 とも言われているのだ。

3人の妖精は帰ろうとして後ろを振り返る。

すると3人は目を見開いた。

後ろを振り返った先に妖怪がいたのだ。

鬼の顔、虎の胴体に長いクモの手足の巨大なたち。

土蜘蛛がそこにいた。

普段ならば絶対に気づく。

それはスターサファイアの動く物の気配を探る程度の能力があるからだ。

しかし気づかなかった。それはなぜか。

答えは簡単だ。この土蜘蛛も能力持ちだったのだ。

それもスターサファイアの能力とは逆の能力。

己の気配を消す程度の能力

スターサファイアの能力を無効化された理由は相手の気配を消す能力を扱う土蜘蛛のほうが強かった。ただそれだけである。

「「「キヤ――！！！！！！！！！！」」」

森に妖精達の声が響いた。

六話

6話

自分の後方から悲鳴が上がった。

後ろを振り返ると10メートルもしない距離にどこかに逃げたはずの妖精達とはじめて見る大きな蜘蛛の姿がある。

陽介は一瞬だけ体が硬直するも自然と地面を蹴り、妖精達のいる所まで走り出していた。

本来妖精は死なない。自然の結晶である彼女達はたとえ消滅したとしても時間が経てば復活できるのだ。

これは幻想郷にいる誰もが知っていること。

それに妖精は人間にとって少し敬遠されたりするのだ。

多くの妖精は多少知能はあるが好奇心旺盛な子供のようなもの。特にいたずらしたりするのが好きである。よく人里に行ってはお店で盗みを働いたり、物を壊したりしている。

ゆえに、たとえ妖精が襲われていたのを目撃しても人間は普通無視をする。

だが陽介はそんなこと知るはずもなかった。

人間ではないと思っではいたが、妖精の姿は透明の羽が生えた10歳も超えていないような子供の姿。

飛び出せずにはいらなかった。

土蜘蛛は前の方足で横向きに薙ぎ払う体勢なのか一度足を下げたかいかかるうとしている。妖精達は体が硬直しているのか動けないでいた。

陽介はなんとか攻撃される前に妖精達の前に出ることができた。

自分の腕よりも一回り大きい足をフライパンで盾にしてなんとか防御を図るが、とっさの行動だったためか踏ん張りが効かず後ろにいた妖精もろとも攻撃を受けてしまう。

4人は元にした場所よりも5メートルほど転がる。

さすがに後ろにいた妖精達はダメージが少ないのかすぐに立ち上がる事ができた。

「お前ら、逃げろ・・・！」

うつ伏せに倒れたまま妖精達に声をかけ、妖精達は少し戸惑いながらも言う事を聞いてくれたらしく、逃げて行った。

逃げるのを見て少し安心した直後体に激痛が走る。

土蜘蛛が足で陽介の体を押さえ込んだのだ。

「かつ、はっ・・・！」

ギギギギギギ……

足が体に食い込み骨が悲鳴を上げる。肺の中の空気が抜け、うまく呼吸もできず、声も出せない。

やば……これ……本気で死んだかも……

諦めかけた時、声が聞こえた。

「日符「アグレッツシブライト」!!!」

「星符「スターライトレイン」!!!」

「月光「ムーンスタイルネス」!!!」

声と共に大量で複数の色の弾幕が土蜘蛛にぶつかる。

土蜘蛛は怯んで裏返しになり、抑えつけていた足が退いた。

声のした方を見ると、逃げたはずの妖精達が顔を青くして、足を震わせながらも立っていたのだ。

陽介は痛みを我慢しながら立ち上がる。

「なん・・・でここに来てんだよ・・・逃げたんじゃなかったのか・・・？」

「うっさいわね！人間なんかに助けてもらったなんて思いたくなくなつたのよ！バーカバーカ！」

背中を叩きながら戻ってきた妖精に声を掛けるも、なぜか文句が帰ってきた。　なんでだよ・・・

土蜘蛛を見るとあまりダメージを受けなかったのか、体勢を整えはじめている。

「よ～～～～っし！」

妖精達が来てくれたのがうれしかったのか、少し気合を入れる陽介。

「？　何しやうとしてるのよ」

「見てろって」

普通はこの隙に逃げた方がいいはずなのだが、陽介は何かを考え付くと土蜘蛛に向かって自ら走り出した。

「これでも、くらえやあああああー！」

勢い良く土蜘蛛にフライパンを振り下ろし、鈍い音が響いた。

陽介の頭の中では、前みたいに敵が吹っ飛ぶことを予想して撲ったのだが……。

ギロリ

何事もなかったかのように鬼のような顔がこちらを向いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？」

お返しとばかりに、まったく体勢の整えていない体を足で突かれ体をくの時に曲がる。メキメキメキ と体の中で鈍い音が響いた。数cm体が浮き、後方に飛ばされ木に激突する。

少し意識が遠のくも、あまりの痛さになんとか意識を保つことができた。

「ちよ、やってんのよー！」

ルナチャイルドが心配したのかこちらに来ようと近づいてくる。

だが土蜘蛛は次の行動に移していた。

一人孤立して低空飛行で陽介の所に向かったルナをめがけて、土蜘蛛が糸を吐き、ルナを拘束したのだ。

叫びながら無理やり激痛の走る体を動かす。

手に握っていたフライパンを土蜘蛛に向かって投げつけた。

r 程度の能力……………

糸を手繰ることに夢中になっている土蜘蛛にフライパンが命中し、先ほどの妖精が放ったスペルカードと同じほど仰け反る。

「……また、また自分じゃないような力が出た……………でもなんで……………?」

土蜘蛛は今度はすぐに起き上がり、ちぎれた糸をひと目見て、こちらを睨みつけ、少し体勢を低くし、一度のジャンプでこちらに飛びついてくる。

フライパンを投げた方の腕に土蜘蛛の足が乗り、鈍い音共に激しい痛みを感じた。

「ぐあゝ ああゝ あああ……………!」

じわじわといったぶるつもりなのか少しずつ体重を加え足に体重をか

けていくのがわかる。

あまりの痛さから逃げ出したくなり腕に乗っている足を鷲づかみするがビクともしない。

痛い痛い痛いイタイ……！！！！

痛みの限界に達する寸前頭に響く自分の声。

与える程度の能力

聞こえた瞬間に反射的に足を掴んでる手に力が入る。

その瞬間土蜘蛛がもがき苦しむような声が森に響いた。

別に握力で足を砕いたとかではない。それこそ土蜘蛛はほとんど無傷だ。

なのに苦しむ。

この場にいる誰にも理解できない。能力を使った陽介にもわからなかった。

でも能力は発動している。

そう、与えたのだ。

今まで自分に蓄積された『痛み』を。

土蜘蛛の外見は何も変わらない。でもとてつもない痛みを感じるのだ。腹に、腕に、全身に……。

陽介の目に映ったのは土蜘蛛は足を引きずりながら慌てて逃走している姿だった。

その光景を見た陽介はさつきまでの緊張が解かれたのか意識がなくなり、真っ暗の世界を目に映し出していた。

六話（後書き）

どうやったたら戦闘を長引かせることができるんだらうか・・。
私にはムリです（・・・）

七話（前書き）

妄想を文字で表すのって難しいですね・・・。
いつも話し短いですがさらに短いです。

七話

真つ暗な闇が少しずつ光が漏れ出すような感覚によって目がさめる。

体は寝ている。背中から少し固めの布団の感触があった。

視界には全てがぼやけて何があるかわからなかったが急速に視界が鮮明になってゆく。

「……………」

「おや、起きたか？」

……………

誰かと思い上半身を起こそうとするが体が痛みまた布団に沈む。

「おいおい、無理をするな」

ため息まじりな声。

上を向いていた首を声のした方に傾ける。

女性がいた。パッと見た感じ全体的に青い。頭には奇妙な帽子をかぶり、長い青色に白がまじったような色。

「まだ怪我がないっていいない。痛むだろう。まだ寝ていたほうがいい」

そついいながら起きようとしたときに捲れた布団を掛けなおしてくれる。

「君が誰なのか聞きたいのだが・・・今は夜だ。また明日にしよう。それまでまたゆっくり寝ていたほうがいい」

やさしい声で言われ、自然と瞼を閉じてまた視界が真っ暗になり、意識が遠のいていった。

チュン・・・チュンチュン

鳥の声で意識が戻ってゆく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・知らない天井だ」

なんだろう。なんかすごい優越感がある。

某アニメのこの言葉を言うのが少し憧れだったりするのだ。

感動に身を震わせながら上半身を起こす。

少し痛みはあるが起きれないほどでもなかった。

服に違和感があり着ている服を見てみるといつも部屋で着ている
ジャージではなく浴衣のような服を着ていた。

頭を左右に振りキョロキョロと周りを見る。

物があまりない畳の部屋。

隣の壁に机が傾けてあり、本来机が置いてあるだろう場所には自

分が寝ている布団があった。

何で俺寝てるんだっけ……？

瞬間的にそんなことを考え出す。

思い出している途中に襖が開いた。

「ああ、よかった。やっぱり起きていたか。おはよう」

木のお盆を片手に持った女性がいた。

「えと……はい、おはようございます。」

ふふ、と少し笑いながら自分の隣に腰を下ろす。

「体の具合はどうだ？」

「少し痛みますけど、大丈夫だと思います。」

「そうか、永遠亭の薬が効いたみたいだな……。」

永遠亭？

「腹が減っているだろう？卵粥だ、食べれるかい？」

小さな土鍋の蓋を開けるとおいしそうな匂いが漂ってきた。

ぐうぐう・・・

大きめな腹がなり、空腹を訴える。

沈黙が走り、差し出されたお盆を受け取った。

「い、いただきます」

「めしあがれ、ゆっくり食べるといい」

少し恥ずかしかったが空腹には勝てなかった・・・。

ガツガツガツガツガツ

「ご馳走様でした！」

お盆を横に置き手をパン！とあわせる。

「ああ、お愛想様。いい食べっぷりだった」

やさしい微笑みを浮かべながらコップや土鍋の乗ったお盆を手にとって立ち上がる。

「少し待っていてくれ、これを片付けたら話しをしよう」

そう言って立ち去っていった。

5分ほど待つと湯飲みが二つ乗ったお盆を手にもってやってきた。

湯飲みを渡され二人ともまずは一口。

「まず自己紹介をしようか。私の名前は 上白沢 慧音 だ。
この家の隣にある寺小屋で教師をやっている。」

「えと、俺の名前は 朝霧 陽介 って言います。泊めてもらっ
ちやっただけで、ありがとうございます」

座ったままお辞儀をし、慧音は少し笑いながら いや、かまわな
いよ と返した。

「さて……陽介君、君は着ていた服装から察するに外来人みた
いだが……ふむ、外来人という言葉は知っているか？」

また外来人という言葉が……

「いえ、わかりません……」

慧音は やはりそうか と頷く。

「あの、それよりもあの子達は大丈夫でしたか？」

「うん？あの子達？」

「はい、俺と一緒にいませんでしたか？」

「いや、君一人人里の入り口で倒れていたよ。夜に軽い警備をしていたら君を見つけたんだ」

あの子達は一緒じゃなかったのか・・・無事だといいいけれど。

「ふむ・・・何か事情がありそうだな。詳しく聞かせてくれないか？」

八話（前書き）

すごい久しぶりの投稿。

仕事をしだしたら忙しくt（ry

短いですが、投稿します。

八話

『幻想郷』 それは幻想となった人、物、人外などが集まる土地。

幻想郷はもともと日本にちゃんと存在していた土地らしい。

その昔、500年以上前は妖怪は普通に存在していた。だが時代が進むにつれて人の文明の発達や人口が増えていく。そして科学でいろいろな物、出来事が証明されていった。

不確かな存在の妖怪達は非科学だと、迷信だと理解されなくなりはじめ、妖怪は人に認識されなくなっていった。認識してもらってはじめて自分を保つことができる妖怪達は人に存在を否定されることよって妖怪は弱まり、絶滅しようとしていた。

そして一人一民族の妖怪『八雲紫』の能力、境界を操る程度の能力で幻想郷と呼ばれる土地一帯に 幻と実体の境界 という境界が張られることになる。これにより幻想郷は、結界の作用により幻となったものを自動的に呼び寄せる土地へと変化し、外国を含む外の世界の居場所を失った妖怪が幻想郷へ来ることになった。

そこで妖怪の賢者とも言われ始めた八雲紫の考えは、幻想郷と外の世界の境界に 非常識 と 常識 を分ける結界を張り、幻想郷を「非常識の内側」の世界とすることで、外の世界の幻想を否定する力を逆に利用して幻想郷の妖怪を助けることに成功した。

そしてそれとは別の結界『博麗大結界』と呼ばれる結界によって幻想郷は外部から隔離された閉鎖空間となり、今もなお幻想郷という土地がありながらも外からは発見されずに存在し続けることができることとなる。

机をはさんで今までの経緯を話す。

「なるほど・・・彼女等は妖精だろうな。特徴から言っておそらくは三月精だろう」

「三月精・・・ですか？」

「ああ、詳しくは知らないがサニー、ルナ、スター と三人とも名前が星に因んでいて光を放っている。だから光の三月精とも呼ばれているよ。」

「なるほど・・・三人ともそんな名前だったんですね。」

「人里に運んだのもこの三人だろうな。助けられたから見捨てられなかったんだろう。基本妖精とはあまり知能が高いほうではないからそんなことはしないんだろうが、妖精の中でも数少ない能力持ちだ。他の妖精とは違うんだろうな」

「能力・・・ですか？」

「三月精の能力はたしか音を消したり姿を隠したりできるはずだ。まあその能力のおかげでイタズラなどを見つけても逃げられることが多いのだが・・・」

慧音は肩おすくめる。

「あははは・・・」

ここでふと、陽介は気絶する前に頭の中で響いた言葉を思い出す。

与える程度の能力

そして蜘蛛を撃退ときの現象。これも能力なのだろう。

「あの、慧音さん。気絶する直前に 与える程度の能力 っ言葉が頭に浮かんだんですけど、これも能力ですか？」

その言葉を聞いて少し驚くが、その後すぐ なるほど・ ・ と呟き一人で納得する。

「それも能力だ。さっき話に出てきた妖怪・ ・ ・土蜘蛛だな。人型ではない低級の妖怪でも普通の人や攻撃的な能力でもなく、力の弱い妖精が倒せるのかと疑問に思ったが・ ・ ・なるほど。しかし珍しいな、昔ならともかく今の時代の外の人間に能力持ちがいるとは」

最後に 例外はいるがな とも言っ。

その例外とは妖怪の山にやって来た守矢の神社の巫女。

現人神の 東風谷 早苗 だ

彼女は最近までは外の世界で暮らしていた。小さなころから神の姿が見え、巫女をしていた彼女なら能力を持っていても何の不思議もない。

「今の時代の外の人間・ ・ ・そういえば俺って帰ることができるん

ほれほれするぐらい綺麗な頭突き……ヘッドバット

「ぐおおおおお……」

倒れこみ左右にゴロゴロと転がる。

「君の近くに落ちていたフライパンか？それなら台所にある。」

数分後転がるのをやめ、上半身を起こす。

「落ち着いたか？」

「ハイ、オチツキマシタ」

慧音は よし と満足した表情で首を縦に振り頷く。

そして冒頭の説明へ……

幻想卿のはじまりについて話した慧音は湯飲みを手にとりお茶を飲んで一息。

「今の説明で幻想卿がどんな場所なのかは理解できたかな？」

「一応できました。 たぶん」

「たぶん？」

「いえ、できました、できましたとも」

元々学校でも成績の悪く、授業中はよく寝たりしていた陽介は理解できていない部分が多々あるが、それを言ったらさらに説明が長くなってしまふ。それはごめんだ。

「あ、でも一つだけ。その博麗大結界っていうのがあるのに何で俺は入ってこれたんですか？」

というかなんで家から来れるんだよ……

「ふむ……私は結界を張っていないからよくはわからないんだが・

・。ただ稀に入れないはずの外の人間が幻想郷にやってきることがある。それを私達幻想郷に住む者は総じてそういつた存在を 外来人とよんでいる。外から幻想郷に入ることを 幻想入り とも言うな」

だから外来人って言われたのか・・・。

「あの・・・その幻想入りした人はもう外の世界には帰れないんですか・・・？」

「いや、帰れるぞ？」

え、帰れんの？

「まじですか！帰れるんですか！？」

勢いあまって立ち上がる

「あ、ああ・・・博麗大結界を張っている博麗神社の巫女にお願いすれば帰ることができるな。」

「ならその神社に行きましょうよ！！」

「とりあえず座りなさい。君はまだ病み上がりだろうに。神社までの道のりはそこそ長いから少し体を休めてから行くでしょう。それに飛べばいいが歩きなら神社に着くころには夜になってしまふ。それとも陽介君は飛べるか？」

今すぐは帰れないとわかると勢いが下がる。しかし帰れるのだ、それだけでもかなりうれしい。

「飛べないです……。慧音さんは飛べるんですか？」

「ああ、飛べるぞ」

なんか普通に言われた……。ここでは常識なのか？

とりあえず今日まで慧音宅で泊まることになった。

妖怪の山に住む巫女はというと

＼／ この幻想郷では常識に囚われては
いけないのですね！

” ”

なぞと言っていたり言なかったり

八話（後書き）

次はいつになることか・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7663x/>

与えるということ。

2012年1月9日02時49分発行